

論文の和文要旨

論文題目

「変容するイスラームの学びの文化—マレーシア・ムスリム社会に関する文化人類学的考察」

氏名 久志本裕子

この論文の目的は、イスラームの学びの文化が、ムスリム社会の近代化と近代的学校制度の拡大に伴いどのように変化してきたのか、そして人々はそのような変化にどのように向き合ってきたのかを、マレーシアを事例として明らかにすることである。現在のマレーシアでは、イスラームを学校やそれに類する場で学ぶことは、ほぼ全てのムスリムが経験する「あたりまえのこと」である。しかし、近代的学校教育が導入される以前の「イスラームを学ぶ」ということは、これとはかなり異なる様相を呈していた。イスラームの学びのあり方や、それに伴う教師像、知識観といった概念は、近代的学校制度の普及に伴い大きく変化したのである。従来の研究の多くは、この変化を単なる形式上の変化や「進歩」として描いてきた。その根本にある認識の変容に踏み込んだ少数の研究も、イスラームの学びが近代的学校の枠組みで理解されるようになったことを跡付けるのみであった。このような先行研究には共通して、近代的学校制度の存在を無意識の前提としてイスラームの学びを論じる傾向が見られる。

本論文で試みたのは、このような視点を相対化し、イスラームの学びの変容を「近代化」と呼びうるような一方向的な変化とは異なる形で描くことである。本論文ではマレーシアを事例として、イスラームの学びが変容していった過程と、それを問い直すような動きの二つを合わせて論じた。マレーシアにおいても、イスラームの学びのあり方が近代的学校における学びに似たものへと変化していったのが主な流れであったが、これに対して一部の人々は違和感、不足感を示し、主流の変化に抵抗するようなイスラーム学習の実践

を生み出してきた。本論文の独自性は、このような近代化に伴うイスラームの学びの変容を問い直すような動きに着目することによって、先行研究の根本にある近代的学校制度の自明視を指摘し、変容の一方向性を問い直す可能性へと目を向けたことにある。

このような問題意識に基づき、本論文では「イスラームの学びの文化」という概念を設定し、その変容を描いた。この「イスラームの学びの文化」とは、教える人、学ぶ人、両者の関係、学ぶ内容、その内容を規定する社会的制度といった「イスラームを学ぶ」という行為に関連するあらゆる要素が結びついて織りなす意味の網の目を指している。「イスラームを学ぶ」ということの意味は、そのコンテクストを構成する諸要素が変化した時、人々の意識とは別の形で変化しうる。近代的学校教育の導入に伴いイスラームの学びのあり方が変化した時、それは単なる形式上の変化ではなく、「学ぶこと」に含まれる文化的意味の変化を伴っていたのである。

本論の構成は以下の通りである。第一部（第1章）ではまず、変化の出発点となる「理念型」を設定するため、マレーシアにおける伝統的イスラーム学習の場である「ポンドック」について記述し、ポンドックを含む様々な伝統的イスラーム学習に共通する学びの文化を構成する諸要素を抽出した。ポンドックにおける学習を構成する諸要素は、①学習の場②教師③学習者④共同体⑤学習内容の五つの項目に分類できる。各項目に含まれる要素の例を挙げると、①立地は農村部が好まれ、土地はポンドックの主宰者である教師（トッグル）に信任する形で寄進された。②トッグルは宗教知識の教授や経済基盤において自律的であり、その権威は高名な師について学んだ宗教知識と道徳性に基づいて人々に認められた。③学習者は老若男女がまじり、多様な学習者が一つの場で共に学ぶことがあった。④学習者は、トッグルを精神的な父と見なし、外部の社会から異なる服装、態度等によって結束した共同体を形成していた。⑤学習は「キターブ学習」と呼ばれ、師のもとでイスラーム学の古典を「表紙から裏表紙まで」一行ずつくまなく読みあげの方法で行われた。以上のような要素の多くを持つ伝統的イスラーム学習においては、学ぶことの意味は信仰行為の一部としてアッラーの報奨を得ることやイスラーム知識の権威のあり方を確認することと結びつき、ひいてはイスラームの世界観と結びついていた。

これに続く第二部と第三部では、このような諸要素が近代的学校制度との関わりで変化していった過程を論じた。20世紀前半には、近代的学校の形式を取り入れたイスラーム学校がマレー半島の各地に設立され始め、ポンドックに代わる専門的イスラーム学習の主要な場となった。第2章では、このような変化の背景にあった認識を1918年にクランタン州で創刊された雑誌『ブンガソ』を資料として論じた。20世紀初頭のイスラーム指導者たちは、イスラーム学習に近代的学校の諸要素を取り入れることは、イスラーム学習を促進するがその性質を変えることはないという認識を持っていた。第3章では、こうした認識の変化には、マラヤにおける近代的学校の普及のみならず、エジプトのアズハル機構の近代化が大きな影響を与えていたことを論じた。20世紀半ばまでに、自律的トッグルに代わって分業的に教授を行う教師が、多様な学習者に代わって年齢によって分けられた学習者が、

キターブ学習に代わり試験制度と年次カリキュラムに沿った学習がイスラームの学びを構成する要素となっていった。

第三部ではイスラーム復興運動（ダアワ運動）が活発化した1970年代から現在までのイスラームの学びの文化の変容を描いた。ダアワ運動の担い手は、1960年代に拡大し始めた高等教育機会を得た最初の世代であった。彼らはイスラーム学習に近代的学校の諸要素を取り入れることに終始した従来の方向性とは異なり、近代的学校制度の存在を当然のものとして受け入れた上で、それをいかにしてイスラーム的なものにするかという反省的な議論を行うようになった。第4章では、このような新しいイスラーム指導者の教育的背景と、彼らの生み出した新しいイスラーム学習のあり方について、マレーシア最大のダアワ団体「マレーシア青年イスラーム運動(ABIM)」の事例を挙げて論じた。

1980年代以降、「イスラーム化政策」が促進されるようになると、ダアワ運動の関心を一部反映する形でイスラームを重視する教育政策が実施された。この中で、国家とその教育制度がイスラーム学習を構成する要素において圧倒的に重要なものとなった。第5章では、国家が全面的に関わることで生まれた国民学校の教科「イスラーム教育」の教科書と授業の内容を検討し、イスラームを学ぶことが進学や就業といった個人の成功や国家の発展に対する有用性によって理解される傾向が強まっていることを明らかにした。ダアワ運動以降の変化は、近代的学校教育をイスラーム的なものに変革することを目指して進められたが、むしろイスラームの学びが近代的学校制度の枠組みによって変化するような結果をもたらした。このような傾向は、宗教の最も専門的教育を担う「宗教学校」でも同様であった。第6章では、ポンドックとして設立され、教育省の管轄する宗教学校へと変化した一つの宗教学校を事例として、そこでの学びの文化の変容について論じた。宗教学校は現在なお伝統的学習の諸要素を残しているものの、近代的学校としての機能を充実する一方で、キターブ学習やトググルの性質に関わる諸要素は失われてきた。

第四部ではこのような意味の変化を解釈する視点として、変化に対する違和感や不足感を持ち、しばしば伝統的要素に言及しながら主流の変化に抗するようなイスラーム学習の実践を行っている人々の事例を提示した。第7章では、第1章で挙げた伝統的学びの文化の諸要素の一部を、現代のクアラルンプール周辺で維持、復興しようとしている4つの事例を挙げた。ポンドック自体は現在では非常に少なくなったが、ポンドックに見られた各要素については、現代の都市部においてもイスラーム学習に不可欠な「伝統」として様々な形で必要とされている。第8章では、試験制度に強く捉われたイスラーム教育では、真のムスリムの共同体を生み出すことはできないと考え、国家の学校教育制度に組み込まれないイスラーム学習の場を形成している人々の事例を挙げた。これに対して第9章では、学校教育制度に沿ったイスラーム教育はそれとして受け入れながらも、そこに不足するものを学校の外で補おうとしている事例として、近年流行している「モチベーション・セミナー」を挙げた。このような場の人々が求めるものは、「実感(kesedaran)」と「感覚(perasaan)」という二つの語に端的に示されているが、それらは伝統的イスラーム学習の諸

要素を通じて得られたものと共通している。

イスラームの学びの文化は、近代的学校における学びを構成する諸要素を多数取り込んで、近代的学校における学びの文化に似たものへと変容した。諸要素の変化に伴い「イスラームを学ぶこと」の全体的な意味もまた変化してきた。しかし、多くのムスリムと研究者は共に近代的学校の学びの文化を当然のものともみならず傾向を持つため、このような意味の変化に無関心であった。これに対して、第三部の一部と第四部の全体で着目したような違和感、不足感、意味の変化を意識化する手がかりを示している。このような違和感や不足感に基づいて、近代的イスラーム教育に失われた要素を取り戻そうとする動きは、意味の変容を食い止めようとする試みとして解釈できる。イスラームの学びの文化の変容は、近代的学校の学びの文化に一方向的に近似していくのみではなく、イスラームを学ぶことの意味をイスラームの世界観に正しく結びつくものとするために様々な試みがなされているのである。このような事例はムスリム社会に限らず、近代的学校教育の普及が、それ以前から存在したローカルな学びの文化を一方的に変化させるだけではない可能性を示している。本論の文化人類学研究としての意義は、教育を対象とする文化人類学研究が十分に論じてこなかったこのような可能性について具体的事例を提示したことにある。